ISSN 1341-4364

近世哲学研究

第 9 号

『存在と時間』と哲学の方法（形式的挙示再考） ――― 田中　敦　1

フッサールにおける他者経験の構造と発生 ――― 榊原　哲也　31

ウィトゲンシュタインの
「規則に従う」論の若干の考察 ――― 子野日俊夫　55

復古のもとでの立憲主義 ――― 竹島あゆみ　67
――ヘーゲル法哲学講義
（ベルリン一八一九／二〇年）の二つの講義録――

＊　＊　＊

《書評》

ヤーコプ・ベーメ著（薗田 坦訳）
『アウローラ ―― 明け初める東天の紅』
――― 福谷　茂　95

2002　Epistola XV

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

今年も『近世哲学研究』をお手元にお送りする時期を迎えた。毎年ながら編集実務に当ってくださった方々の労をねぎらいたい。

また本号は初めて当会会員外から榊原哲也先生の玉稿を頂くことができた。先生は四箇年度に渡って京都大学文学部にご出講くださり、多くの学生院生に幅広いご指導を賜った。篤くお礼申し上げる次第である。

ところで、どこで読んだのかは忘れたが、次のような話がある。ある専修学校を創設するに当って、アメリカの同種の学校のカリキュラムを参考にした。そこにEnglishとあったのを、うっかり「英語」と訳してしまった。ためにその学校では、相当時間の英語が生徒に課せられることになってしまい、結果的に英語力の優れた卒業生が輩出した（?）、というのである。

かつての日本の高等教育において哲学が保っていたポジションも、一九世紀の、特にヨーロッパの大学で哲学が得ていた制度的地位を、誤訳とはいわないまでも直訳したことによって、支えられていたのは否定しがたいのではないだろうか。昨今のポストとカリキュラム上の削減も、この観点から言えば、直訳がこなれてきたのだとさえ捉えられるのかもしれない。だからこの際、翻訳文化からの脱却を慶賀しようなどと皮肉を言おうとしているのではない。

そもそもヨーロッパでも、哲学がこれほどの制度的に保証された地位を手に入れたのは一九世紀になってからである。デカルト以来、主として在野の人物によって担われてきた、それまでの近世哲学の成果を、アカデミー側が吸収しこなしえた成果こそが、一九世紀の特にドイツの大学において制度化された「哲学」なのである。それがヴィクトル・クーザンの媒介によってフランスにも移入され、彼の地のアカデミズムとして結晶したことは哲学史上の著しい、しかし未だに十分研究されていない重大なテーマとして「ファースト・コンタクト」研究の対象たり得るだろう。しかし一旦制度化され定着されるや、それらがまた、ドイツ哲学なりフランス哲学なりの伝統として終始一貫あったように観念され、事実両国に特有のカラーを帯びたのであった。

エリック・ホブズボームはthe invention of traditionという概念を提唱している。伝統は単に「ある」のではなく、ある点で、また時点で「発明」される。発明されるや〈古来の風格〉を備える。このようにして現在も伝統が発明されつつある、というのである。この概念をいわば逆手にとることができるのではないだろうか。哲学の社会的制度的退潮を伝える声のみ聞こえてくる日々に生きる、われわれに今求められているのは、この意味での発明の才ではないだろうか。持ち込まれたものを、われわれの伝統として「発明」すること。近年急速に高まっている日本哲学に関する外からの視線は、この点で大きな示唆を与える。そう考えると、陳腐化した情勢判断を超えた展望がひらけてくる気がするのである。もちろん、それは断じて「捏造」であってはならないのだけれども。

（F）

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

祝辞　酒井　修

ハイデッガーにおいて哲学を　田中　敦
——現存在の現象学的存在論考究——

カントと初期フィヒテとの接点　北岡　武司

義務論としてのカント倫理学　蔵田　伸雄
——功利主義との対比——

仮象と反省　山脇　雅夫
——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——

第二号（一九九五）

カント哲学における「経験」概念について　福谷　茂
——「世界」概念導入のための端緒として——

ヘーゲルのコルポラツィオーン論　早瀬　明
——市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み——

工学はどういうタイプの学問か　齊藤　了文

信仰の情熱とその逆説　田中　一馬
——キェルケゴール『おそれとおののき』におけるアブラハム解釈をめぐって——

ハイデッガーのヘーゲル解釈　橋本　武志
——意識の二義性と意識の転換——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点　子野日俊夫

読書人世界から学者共和国制度へ　福田喜一郎
——理性を制度化しようとしたカントの試み——

デカルトにおける愛の区別について　武藤　整司

未済の人倫　石田あゆみ
——『精神の現象学』主—奴論の一解釈——

ガダマーのディルタイ批判　折橋　康雄
——『真理と方法』を中心に——

第四号（一九九七）

一本の綱（Seil）としての人間　吉川　康夫
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題——

デカルトの懐疑について　安藤　正人
——『省察』の「反論と答弁」を資料として——

市民と国家の媒介　小川　清次
——「国民」形成の一側面——

『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について　橋本　武志

自然主義的存在論の隘路　次田　憲和
——フッサールの「領域的存在論」における超越論的構成の「自己関係的構造」——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」　武藤　整司
——デカルト的行論の一考察——

ディルタイに於ける客観的精神の概念について　折橋　康雄
ハイデガーの他者論　安部　浩

第六号（一九九九）

デカルトにおける《真理》と《存在》　倉田　隆
——明晰かつ判明に知得されるもの——
ヘーゲルの根拠論　山脇　雅夫
——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理　次田　憲和
——フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座——
シェリング哲学の出発点　浅沼　光樹
——人間的理性の起源と歴史の構成——

第七号（二〇〇〇）

——薗田　坦教授　退官記念号——

薗田　坦教授　略歴・業績一覧
《講演》
近世哲学における神の問題　薗田　坦
——シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義——
近世哲学とはなにか　福谷　茂
——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭　武藤　整司
——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味　山脇　雅夫
——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考　橋本　武志
——可能性概念を手がかりに——
生と音楽　折橋　康雄
——ディルタイに於ける生と音楽の時間性の問題をめぐって——

第八号（二〇〇一）

自由の軌跡　北岡　武司
——批判哲学における自由の可能性の意味——
認識か解釈か　福谷　茂
——新しい哲学史像のために（二）——
G・ハーマン相対主義説の論理　田中　一馬
歴史的理性の生成　浅沼　光樹
《書評》
北岡武司著『カントと形而上学——物自体と自由をめぐって』　橋本　武志
N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カント『純粋理性批判』註解』　長田　蔵人

編集委員会　代表　福谷　茂
委員　武藤　整司
山脇　雅夫
長田　蔵人
石田真衣子

執 筆 者 紹 介

田中　　敦　　国際基督教大学教授

榊原　哲也　　立命館大学教授

子野日俊夫　　岡山県立大学助教授

竹島あゆみ　　岡山大学助教授

福谷　　茂　　京都大学助教授

（執筆順）

近世哲学研究　　第９号

2003年3月31日　発行

編集・発行　　京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表　　福谷　　茂
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/
ＴＥＬ(075)753-2444
振替　01080-3-31430

印 刷 所　　協和印刷株式会社
〒615-0052　京都市右京区西院清水町13
ＴＥＬ(075)312-4010(代)

定価　1200円(本体 1143円)

ISSN 1341-4364

STUDIES in MODERN PHILOSOPHY

No. 9

《Articles》

Atsushi TANAKA : Das Problem der Methode in *Sein und Zeit* (Die formale Anzeige noch einmal untersucht) 1

Tetsuya SAKAKIBARA : Struktur und Genesis der Fremderfahrung bei Husserl 31

Toshio NENOHI : Some Remarks on Wittgenstein's "Following a Rule" 55

Ayumi TAKESHIMA : Konstitutionalismus unter der Restauration ——Zwei Nachschriften von Hegels Vorlesung über die Philosophie des Rechts in Berlin 1819/20—— 67

* * *

《Review》

Shigeru FUKUTANI : Jacob BÖHME, *Aurora, oder Morgenröthe im Aufgang* [Japanische Übersetzung von Tan SONODA] 95

2002 Epistola XV

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University